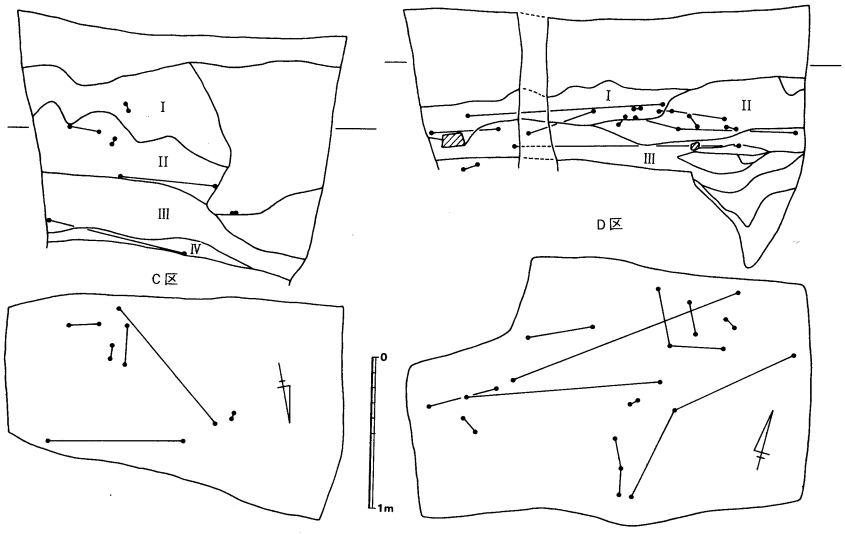
Ⅳ　出土遺物

調査により出土した遺物は，土器，石器，骨角牙器，貝輪，土製品，人骨・獣魚骨等の自然遺物があり，以下説明を加えることとするが，これらのうち獣魚骨等動物遺存体については，分析の過程を経ていないため本書に掲載することができなかった。他日に期したいと思う。

なお，各調査区より出土した遺物は，すべてドット・マップに1/10で図化し，また一括出土を示す遺物については適宜実測を行い取り上げた。また取り上げに当たっては，全遺物に対し海抜高度を与えている。

1．遺物出土の状況（第７図，図版２・３）

第７図にＣ・Ｄ区の土器接合関係を示した。接合例はＢ区で３例，Ｃ区で６例，Ｄ区で11例，Ｅ区で３例である。時間をかければ接合例は更に増すと思われる。さて，Ｃ区の関係は同一層内における２点間接合であり，離れているもので水平距離100cm，垂直距離20cmを測る。Ｄ区では２点間接合８例，３点間接合３例，同一層内接合７例，２層に亘る接合４例で３層以上にかけての例はない。水平距離160cm，垂直距離15cm内外が最も離れているものである。これらの接合は２点または３点の破片であり完形に復するものではない。よって廃棄の範囲は更に広範に分布していることが十分に想定でき，また３層間接合が見られないことは，層の撹乱が少ないこと，或は一定期間内に整然と廃棄・堆積したことを示唆するものであろう。



第７図　Ｃ・Ｄ区土器接合関係図（１／50）

2．土器（第８図～第20図，図版３～６，第２表～第３表）

第２表～第３表に示したのは，全出土土器の器面調整手法の一覧表である。調査区を層毎に列記し，また滑石の有無，胴部とそれ以外のものに区分して示した。そして横欄，縦欄に記した手法は主体的に行われたもの，或は最終的に施されたもので代表させている。よって２つ以上の手法が施された例が存在するのであるが数量的には少なかったため主体的手法により１つの欄に包括した。

概観するとナデ，ササラ状（器面に付けられた条線状のものを指しており，ナデ，貝殻の施文具とは明らかに異なる。田中良之氏[註4]のいう柾目板，逆目板に近いものと想定されるが両者の識別ができなかったため，ここではササラ状として一括して扱った。），貝殻条痕状が主体を占め，ヘラケズリ，ヘラミガキは客体となっている。

また，内外面共に同一手法による器面調整が主体的と考えられるが，必ずしも同一でなく，その場合でも主体を占める三者の手法以外の手法を用いたものは数量的に少ないようである。

さて，滑石を混入する土器のうちナデ・ササラ状以外の器面調整手法によった土器を出す層位は，ヘラケズリがＢ区Ⅳ・Ⅴ層，貝殻条痕状がＢ区Ⅲ層，Ｃ区Ⅲ・Ⅳ層，Ｄ区Ⅰ・Ⅲ層・Pitとなり殆どの層からナデ手法以外のものを出土している。

因に田中氏論文中の器面調整一欄表によれば，阿高Ⅱ式まではナデ調整が多いのであるが，同Ⅲ式，坂の下Ⅰ・Ⅱ式，南福寺式期になるとナデ手法以外のケズリ・板目手法による調整が多く採用されるようになる。つまり，地域的偏在性も十分に考えられるが，時期が降るに従って器面調整手法を簡略化する，という動態が一般化するのではないかと考えられる。これは文様施文のあり方とも一致しているようだ。

このように器面調整手法から見てくる時，本遺跡出土の滑石混入土器は時期的に中期末以降の手法をより多く採用している土器群と言えよう。

次に土器の説明に入る前に，本遺跡出土土器群の分類を示しておく。

Ⅰ類	阿高式	Ⅸ類	市来式
Ⅱ類	坂の下式	Ⅹ類	北久根山式
Ⅲ類	南福寺式	Ⅺ類	貝殻条痕文系
Ⅳ類	出水式	Ⅻ類	型式不明
Ⅴ類	中津式	XIII類	無文土器
Ⅵ類	福田ＫⅡ式	XIV類	底部・脚台部
Ⅶ類	鐘ヶ崎式		
Ⅷ類	御手洗Ａ式		

●Ａ区Ⅰ層出土土器（第８図１～３，４，７，図版３）

Ⅰ類(1)　口縁部に３段の連点文を施す。押点文は指頭と爪先で施文。滑石粉末を混入。調整

第2表　土器調整手法一覧表

調査区	層位	滑石混入の有無	外面／内面	ナデ	ササラ	貝殻条痕	ケズリ	ヘラミガキ	不明		計
A	I	無	ナデ	8	9	5					22
			ササラ	5	3						8
			貝殻条痕			8					8
			不明						54		54
			口縁部							9	9
			胴有紋							2	2
			底部							2	2
			土製品							1	1
			小計	13	12	13			54	14	106
		有	ナデ	7	9						16
			ササラ	6	13						19
			不明						32		32
			口縁部							13	13
			胴有紋							15	15
			底部							1	1
			小計	13	22				32	29	96
			弥生式土器							6	6
			合計	26	34	13			86	49	208
	III	無	ナデ	1	3						4
			ササラ	1							1
			貝殻条痕			1					1
			不明		2				4		6
			口縁部							1	1
			底部							1	1
			小計	2	5	1			4	2	14
		有	ナデ	1	8						9
			不明	1	4						5
			口縁部							2	2
			胴有紋							3	3
			底部							1	1
			小計	2	12					6	20
			合計	4	17	1			4	8	34
B	II	無	ナデ	5	14	3					22
			ササラ		10	1					11
			貝殻条痕	1		4					5
			ケズリ			1					1
			不明						5		5
			口縁部							7	7
			胴有紋							3	3
			底部							3	3
			小計	6	24	9			5	13	57
		有	ナデ	9	2						11
			ササラ	4	4						8
			ケズリ	1							1
			不明						4		4
			口縁部							3	3
			胴有紋							1	1
			底部							2	2
			小計	14	6				4	6	30
			弥生式土器							4	4
			合計	20	30	9			9	23	91
	III	無	ナデ	4	10						14
			ササラ	8	6	3	1				18
			不明	1	1				18		20
			口縁部							4	4
			胴有紋							5	5
			底部							1	1
			小計	13	17	3	1		18	10	62
		有	ナデ	13	10						23
			ササラ	6	10						16
			貝殻条痕			1					1
			不明						17		17
			口縁部							16	16
			胴有紋							5	5
			底部							5	5
			小計	19	20	1			17	26	83
			合計	32	37	4	1		35	36	145
C	IV	無	ナデ	4	4						8
			ササラ		1	1	1				3
			貝殻条痕		1						1
			ケズリ	1							1
			不明						10		10
			口縁部							2	2
			底部							3	3
			小計	5	6	1	1		10	5	28
		有	ナデ	3	6						9
			ササラ	3	9		1				13
			不明						7		7
			口縁部							6	6
			胴有紋							2	2
			底部							1	1
			土製品							1	1
			小計	6	15		1		7	10	38
			瓦							1	1
			合計	11	21	1	2		17	16	68
	V	無	ナデ	41	20	1					62
			ササラ	23	13	2		4			42
			貝殻条痕	5		6					11
			ケズリ	3		1					4
			ヘラミガキ		2						2
			不明	17	2				105		124
			口縁部							26	26
			胴有紋							14	14
			底部							25	25
			小計	89	37	10		4	105	65	310
		有	ナデ	91	65		1				157
			ササラ	22	50		3				75
			貝殻条痕		2		1				3
			ケズリ		3						3
			不明	29	16		1		77		123
			口縁部							57	57
			胴有紋							40	40
			底部							22	22
			土製品							2	2
			小計	142	136		6		77	121	482
			弥生式土器							1	1
			合計	231	173	10	6	4	182	187	793
	I	無	ナデ	1	1	1					3
			ササラ			3					3
			貝殻条痕			3					3
			ケズリ		3						3
			不明						6		6
			口縁部							1	1
			底部							1	1
			小計	1	4	7			6	2	20
		有	ササラ		4						4
			不明	1					4		5
			土製品							3	3
			小計	1	4				4	3	12
			合計	2	8	7			10	5	32
	II	無	ナデ	22	19	8					49
			ササラ	7	15	6					28
			貝殻条痕		1	6					7
			ケズリ	2	4						6
			ミガキ	1							1
			不明	6	2	4			19		31
			口縁部							4	4
			胴有紋							3	3
			底部							9	9
			小計	38	41	24			19	16	138

第3表　土器調整手法一覧表

調査区	層位	滑石混入の有無	外面／内面	ナデ	ササラ	貝殻条痕	ケズリ	ヘラミガキ	不明		計
D	II	有	ナデ	21	15						36
			ササラ	8	18						26
			貝殻条痕	4	1						5
			ケズリ	2							2
			口縁部							24	24
			胴有紋							16	16
			底部							12	12
			小計	35	34					52	121
			弥生式土器							3	3
			合計	73	75	24			19	71	262
	III	無	ナデ	1		1					2
			貝殻条痕			1	1				2
			不明						5		5
			小計	1		2	1		5		9
		有	ナデ	5	6						11
			ササラ	8	9	2					19
			貝殻条痕	2	1	1					4
			不明			1			1		2
			口縁部							11	11
			胴有紋							9	9
			底部							3	3
			小計	15	16	4			1	23	59
			弥生式土器							1	1
			合計	16	16	6	1		6	24	69
	IV	無	ナデ	3	2	1	2	1			9
			ササラ			2					2
			貝殻条痕		2						2
			ケズリ	1							1
			不明	1					16		17
			口縁部							5	5
			胴有紋							1	1
			底部							1	1
			小計	5	4	3	2	1	16	7	38
		有	ナデ	5	4						9
			ササラ	2	4						6
			貝殻条痕	4	1	1					6
			不明						9		9
			口縁部							15	15
			胴有紋							5	5
			底部							4	4
			小計	11	9	1			9	24	54
			弥生式土器							1	1
			合計	16	13	4	2	1	25	32	93
	I	無	ナデ	20	13	7	2				42
			ササラ	7	18	20		4			49
			貝殻条痕	4	8	13					25
			ケズリ	6	2		1				9
			ミガキ	1				5			6
			不明			1			21		22
			口縁部							24	24
			胴有紋							5	5
			底部							12	12
			土製品							3	3
			小計	38	41	41	3	9	21	44	197
		有	ナデ	9	10						19
			ササラ	8	7	1					16
			不明						10		10
			口縁部							7	7
			胴有紋							1	1
			底部							3	3
			小計	17	17	1			10	11	56
			弥生式土器							6	6
			合計	55	58	42	3	9	31	61	259
	II	無	ナデ	62	31	27	8				128

調査区	層位	滑石混入の有無	外面／内面	ナデ	ササラ	貝殻条痕	ケズリ	ヘラミガキ	不明		計
			ササラ	22	32	1	8	1			64
			貝殻条痕	17	15	66	4				102
			ケズリ	5		5	11				21
			ミガキ	2		1		9			12
			不明						23		23
			口縁部							22	22
			底部							25	25
			把手							1	1
			小計	108	78	100	31	10	23	48	398
		有	ナデ	28	17		6				51
			ササラ	7	18		5				30
			ケズリ	5	10		5				20
			不明						1		1
			口縁部							14	14
			胴有紋							5	5
			底部							9	9
			小計	40	45		16		1	28	130
			合計	148	123	100	47	10	24	76	528
	III	無	ナデ	8	7	8					23
			ササラ		8						8
			貝殻条痕	2		12					14
			ケズリ	2			1				3
			不明						3		3
			口縁部							10	10
			底部							5	5
			把手							1	1
			小計	12	15	20	1		3	16	67
		有	ナデ	9	7	6					22
			ササラ	3	3	3					9
			ケズリ		6	2					8
			不明						14		14
			口縁部							9	9
			胴有紋							3	3
			底部							6	6
			小計	12	16	11			14	18	71
			合計	24	31	31	1		17	34	138
	Pit	無	ナデ	2							2
			ササラ	2		1					3
			不明						1		1
			小計	4		1			1		6
		有	ナデ	2	1						3
			ササラ		2						2
			不明						3		3
			底部							1	1
			小計	2	3				3	1	9
			合計	6	3	1			4	1	15
E		無	ナデ	15	17	6	1	3			42
			ササラ	8	21		2	1			32
			貝殻条痕			6					6
			ケズリ					1			1
			ミガキ		1						1
			不明						37		37
			口縁部							5	5
			胴有紋							10	10
			底部							7	7
			土製品							1	1
			小計	23	39	12	3	5	37	23	142
		有	ナデ		8		5				13
			ササラ		29		10				39
			貝殻条痕		2		1				3
			不明						9		9
			口縁部							23	23
			胴有紋							13	13
			底部							11	11
			小計		39		16		9	47	111
			弥生式土器							1	1
			合計	23	78	12	19	5	46	71	254

手法は，器表に石灰分，泥が付着しており不明。

II類(2)　滑石粉末を混入する胴部片でヘラによって幾何学文を施す。坂の下遺跡[註5]胴部第Ⅰ類土器，阿高貝塚出土品[註6]に類似する。内面は上位をササラ，下位を貝殻にて調整。

VIII類(4)　胴部片で2段の刺突文を施す。施文具は二枚貝の貝殻腹縁と思われる。施文具が貝殻であり，竹管，ヘラと異なっているがこの類に入るものと思われる。黒褐色を呈し，外面ナデ，内面ヘラケズリ調整。

XIII類(3)　僅かに小波状をなす口縁部で口唇部に押圧文を施す。滑石粉末混入。

XIV類(7)　滑石混入の茶褐色を呈する脚台部である。復元底径約11cm，厚さ1cmほどで端部は内側に張り出す。1.5cmほどの円孔を12個程度穿つと考えられ，2個のみ現存している。外面ササラ，内面ナデ調整。

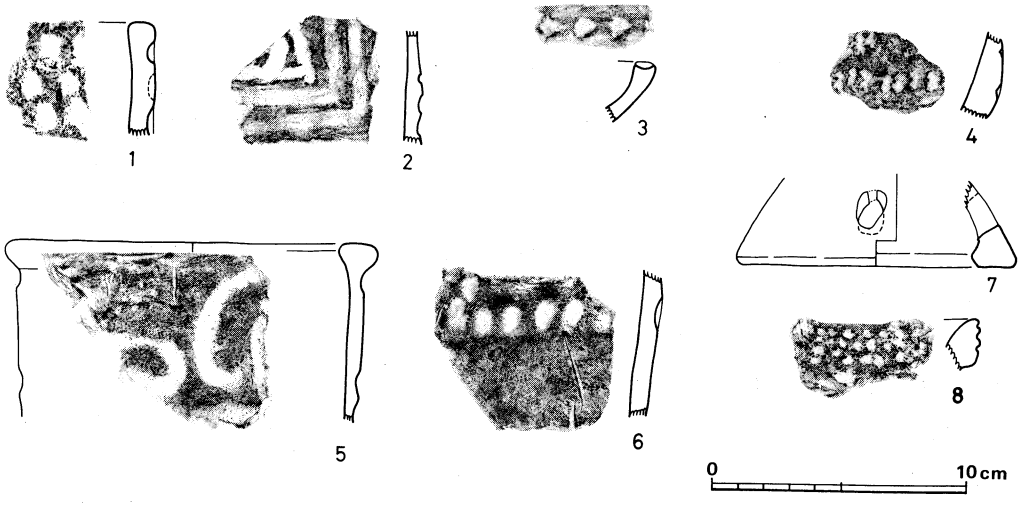
● A区III層出土土器（第8図5・6・8，図版3）

Ⅰ類（5・6）　復元口径15cmを測る深鉢である。口縁部は内外に張り出す。頸部から胴部にかけて指による浅い凹線で曲線文と蕨手文（？）を描いている。器壁は薄く，滑石粉末を含む。外面には石灰分が付着して調整不詳，内面および口唇部はササラにて調整している。6は滑石粉末を混入する胴上部片で指頭および爪先による連点文が認められる。内外面共にササラによる調整。

VIII類(8)　口縁部を肥厚させて文様帯を作り，棒状工具による連続刺突文を3段に施している。内面はナデ調整。灰茶色を呈する。

● B区II層出土土器（第9図9～17，図版3）

Ⅰ類(9)　小波状をなす口縁部で指による連点文を施す。内面および口唇部はササラ調整。滑石粉末を混入し，茶褐色を呈する。口唇部は外傾している。



第8図　A区Ⅰ・III層出土土器（1／3）

III類(11)　口縁部文様帯をヘラにて作出し，直下に横位の凹線がある。口縁部には斜位凹線文をヘラにて施文し，口唇部にもヘラにて押圧文を施す。滑石粉末は混入していない。

IV類（12・13）　隆帯を貼付したもので，12はヘラによる浅い凹線文を横走させ，下位に隆帯を貼付し，指頭および爪先による凹点を施文。13は口唇部に隆帯を貼付しヘラで刻み目を施す。口唇部も同様である。12・13共に内面ササラにて調整。

IX類(15)　外側に段をなして外反する口縁で口唇部外側と段をなす部位に斜位の連続爪形文を施し，中間に斜位の貝殻腹縁文を有する。類似の土器は五島福江市の白浜貝塚[註7]出土品の中にあり，草野式との近縁性も指摘されたが[註8]，草野貝塚[註9]出土の市来式に近いためこの類に含めておく。後述の102と比較すると細部において若干異なる。茶褐色を呈し，細砂粒を多く含んでいる。外面ササラ，内面ナデ調整。

XII類(16・17)　16は灰茶色を呈する磨研土器である。「く」字状に折れる胴部に1条の沈線を施す。17は磨消縄文土器で2本1組の沈線を縦沈線で区切り縄文帯を作って施文効果を高めている。充塡縄文が施され，一部赤色顔料が認められる。茶褐色を呈し，焼成は良好である。

XIII類(10・14)　10は波状口縁をなす口縁部で2個の突起をもつ。茶褐色を呈し，滑石粉末を混入する。調整手法は不詳。14は器壁2cmほどの分厚い土器でミニチュアの手捏ね土器である。口縁部は内側に折り込むように作っている。外面に一部ササラ状線条痕が看取される。色調は赤褐色を呈し，胎土は精良，焼成良好である。これらよりして後期阿高式系土器に伴うものと考えられる。

● B区III層出土土器（第9図18～23，図版3）

II類(18)　胴部片で竹管もしくはヘラによる凹線を施す。滑石粉末を混入し，調整不詳。

III類(22)　竹管もしくはヘラによる凹線文を施す。内面ササラ調整。赤褐色を呈し，滑石粉末を混入する。

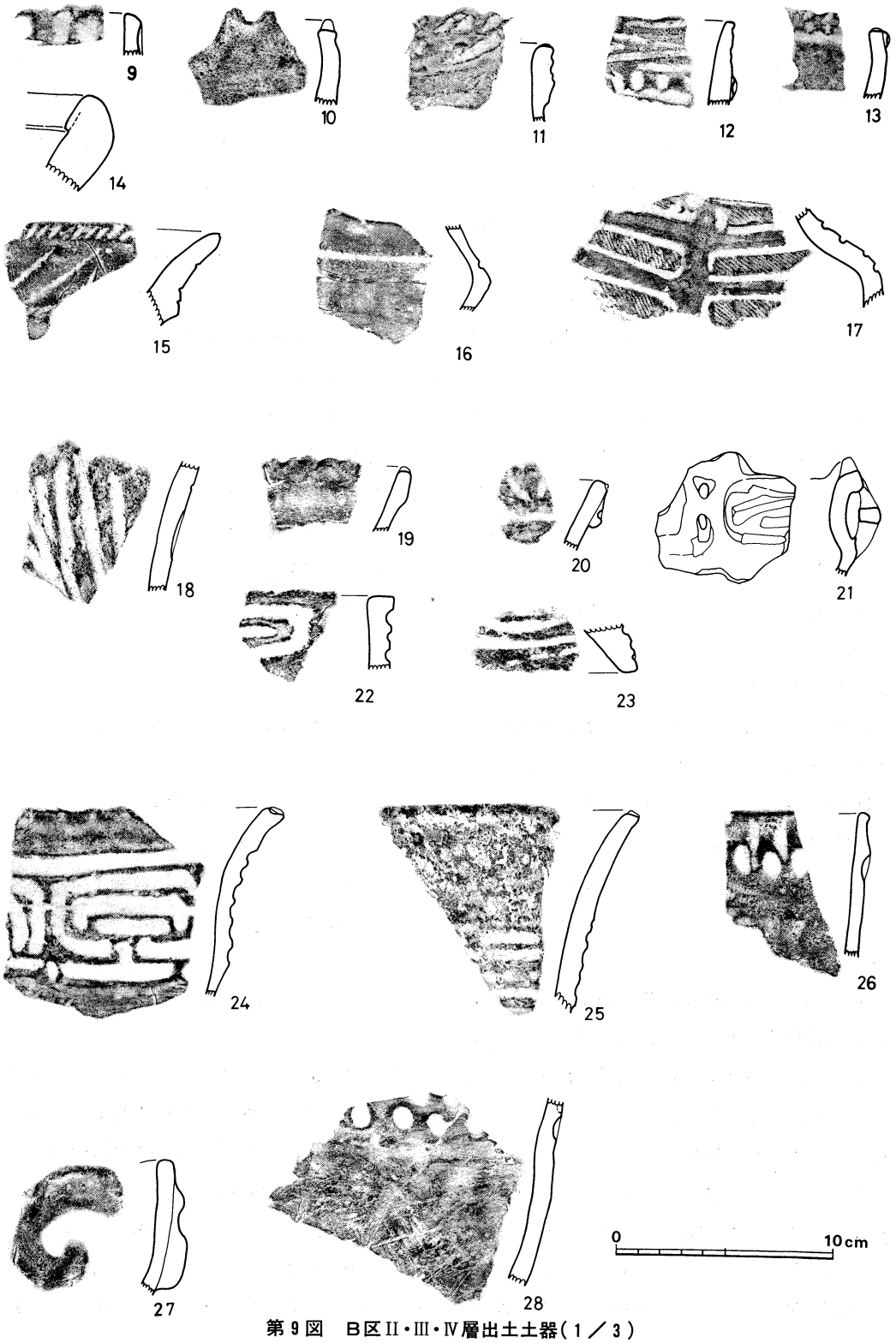
IV類（20・21）　口縁外面に粘土を貼付し文様帯を作る。1条の沈線を施し，上位に刺突文を配す。外面ササラ，内面貝殻（？）のちササラにて調整。滑石紛末を混入する。21は橋状把手部で2本の粘土紐を中央で接着しているため，上下に透かしができている。口唇部には2個の突起を付ける。口縁部は外反しており，竹管もしくはヘラによる横直線文が3条施される。

XII類(19)　小波状をなすもので，外面はケズリにて口縁部を作出し，ササラ調整，内面もササラにて調整。滑石粉末を混入する。

XIV類(23)　脚端部で2条の沈線と短直線を斜走させる。調整不詳。

● B区IV層出土土器（第9図24～28，図版3）

I類（24～28）　24はIII層出土のものと接合した。小波状をなす口縁をもち，ゆるやかに外反する深鉢形をなす。指頭による凹線で幾何学文一単位を雄大に描き，上下に凹直線文をめぐらす。次の文様との間には凹点文を施す。25は24と相似た形状を示すもので胴部に浅い凹線



第9図　B区II・III・IV層出土土器（1／3）

文を6条めぐらしている。26は連点文を2段に配し，上位は細長く線状に，下位は丸く施文する。共に指頭および爪先で施文したものである。27は波状突起をもつ口縁部で，外面に粘土を貼付して丁寧に指でナデつけている。28は2段に連点文が看取される。指頭押圧による凹点文である。24～26は内外面共ササラ，25は内面ササラのちナデ，27は内外面共にナデ，28は凹点文施文後ササラ，内面は貝殻もしくはササラにより調整。すべて滑石粉末を混入している。

●B区V層出土土器（第10図29～49，図版3）

I類（29・32・37・38・40）　指頭により施文されたものである。29は3段の連点文を施し，その下に2条の平行凹線文をめぐらす。32は2段の連点文で，上位は口唇部にかなり入り込んでいる。37は凹線文，凹点文，短直線文を交互に配するものと思われる。38は外反し，山形もしくは波状口縁をなすものと思われる。25と同様の浅い凹線で施文している。口唇部は押圧のため内側にはみだしている。40は蕨手文を雄渾に描いており，中央に凹点文を施す胴部片である。補修孔を有する。37・38は滑石を含まず，37の内面は貝殻で調整している。

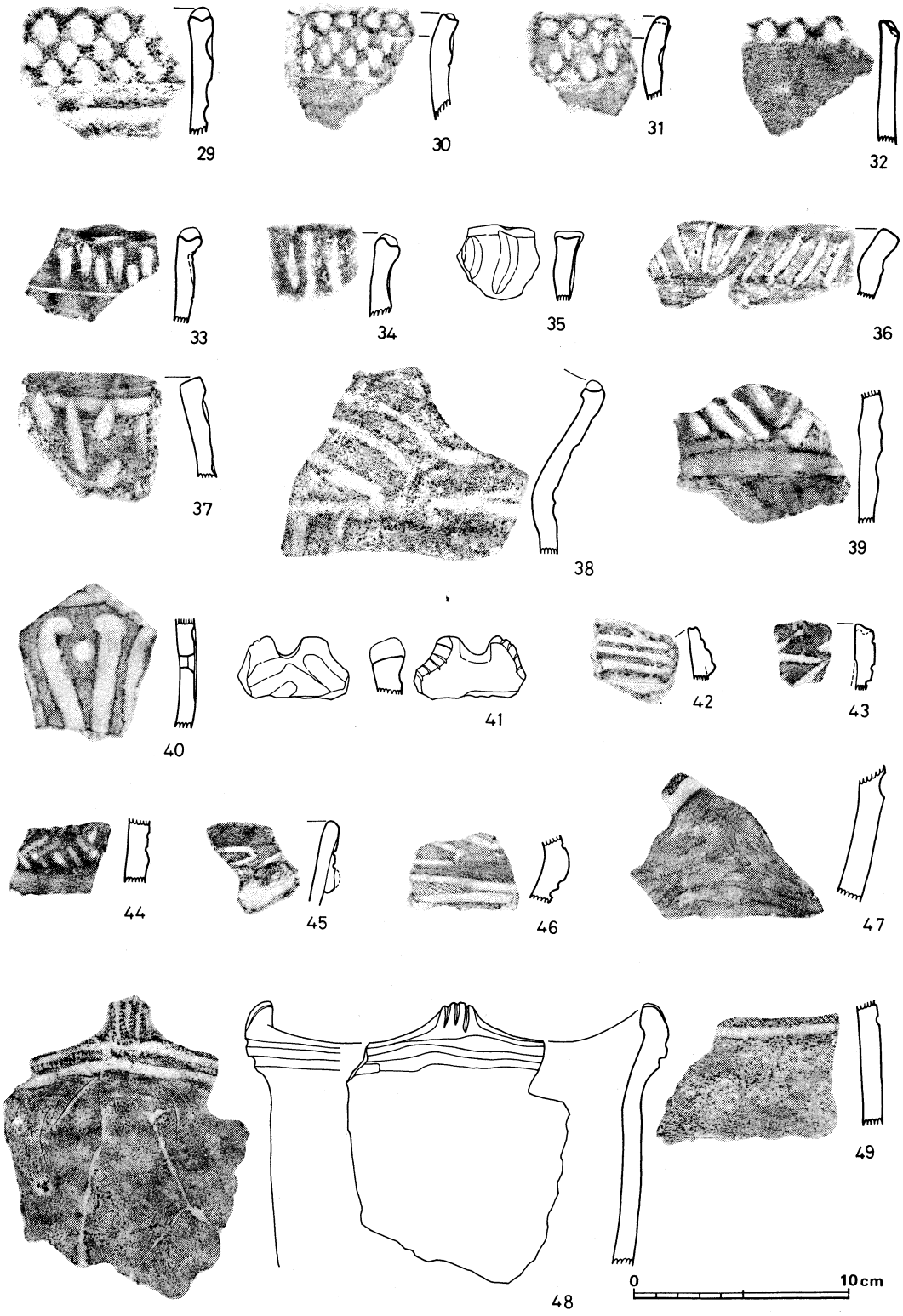
II類（30・31・33・39）　指頭および爪先，竹管またはヘラにより施文されたものである。30・31は小波状をなす口縁で，口唇部に押圧文を配し，連点文の下に沈線をめぐらして無文帯との境界としている。33も同様であるが，竹管もしくはヘラで下から上へ刺突した刺突文と呼ぶべき施文をしている。或はIV類とした方が穏当か。39は竹管により幾何学文を描き，指頭による凹線をめぐらして無文帯と区劃している。すべて滑石を含み，内外面ともササラによる調整をしている。

III類（34・35）　少し外反する口縁部で小波状をなす。口唇部は押圧しており，その下に指頭と爪先による短直・弧線を描く。共に滑石を含んでいる。

IV類（36・42～45）　36はIII類と近似した口縁をなすものであるが，施文具が棒状もしくはヘラ状のものに変化しており，42～45も同様である。42・43・45は口縁部を肥厚させ文様帯を作る。42は3本沈線を，43・44は稜杉文を，45は曲線文を描いている。36は口縁下位を内外面共にヘラケズリし，上位はナデて仕上げる。42・45は共にナデ，42・44はササラにて調整。

VII類(46)　磨消縄文土器である。地文に擬似縄文を施文し，沈線で区劃して磨消部とし文様効果を高めているが一部に消し残りが認められる。

XII類(41・47～49)　41は波状口縁をなすもので，突起部である。外面には指による浅い凹線文を口縁に沿うように施文し，また口唇部にはヘラによる刻目を入れる。茶褐色を呈し，滑石粉末を混入する。IV類に伴うものか。47・49は共に磨消縄文系の土器で，僅かに擬似縄文帯が看取される。47は縄文帯と無文部を凹線により区劃し，縄文帯には赤色の顔料が付着している。外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリののちヘラミガキを施すようである。49は内外面共にナデて仕上げる。48は4つの頂部をもつ山形口縁をなすと思われる深鉢形土器である。頸部は外反し，口縁部は内湾している。波頭部に3条の沈線を入れ，口縁に平行して2条の沈線を施文し，擬



第10図　B区Ⅴ層出土土器（１／３）

似縄文を施文している。器面調整は，外面がササラもしくはヘラによるミガキで，成形後少し乾燥してから調整を行っている。内面は口縁部がササラ，胴部が貝殻により調整している。復元口径19.5cm。柏田遺跡住居跡周辺出土土器[註10]の中，口縁部G形と分類されたものに類似。

● C区Ⅰ層出土土器（第11図50～53，図版3）

Ⅰ類（50・51）　共に胴部片で，浅い凹線が縦走する。滑石は50のみ混入している。器壁調整は内外面ともナデにより仕上げる。

Ⅷ類（52）　爪形文を施したもので左から右へ連続刺突している。Ⅱ層出土の232と相似しており，同一個体かと考えられる。内外面共にナデて仕上げる。

Ⅺ類（53）　口縁部は少し尖り気味にしている。全面貝殻にて調整。灰黒色を呈している。

● C区Ⅱ層出土土器（第11図54～77，図版3～4）

Ⅰ類（54・56・67・68）　55は3段の連点文に斜行する浅い凹線を施文するもので，指による。口唇部は外傾する。56は3段の連点文を施す。67・68は胴部片で凹線文を縦走させる。

Ⅱ類（55・57・66）　指頭および爪先により施文した連点文をもつもので，55は3段，57は2段施文する。57には補修孔が穿たれている。66はヘラもしくは竹管によって施されたと思われる浅い凹線文を縦走させている。いずれも滑石粉末を混入する。

Ⅲ類（58・63）　58は指頭および爪先で一重の渦文を施文した口縁部で，わずかに内湾している。63は凹直線文をめぐらすもので，指先で施文されている。外面ササラ，内面ヘラケズリ調整。或はⅡ類の範疇に入るものか。

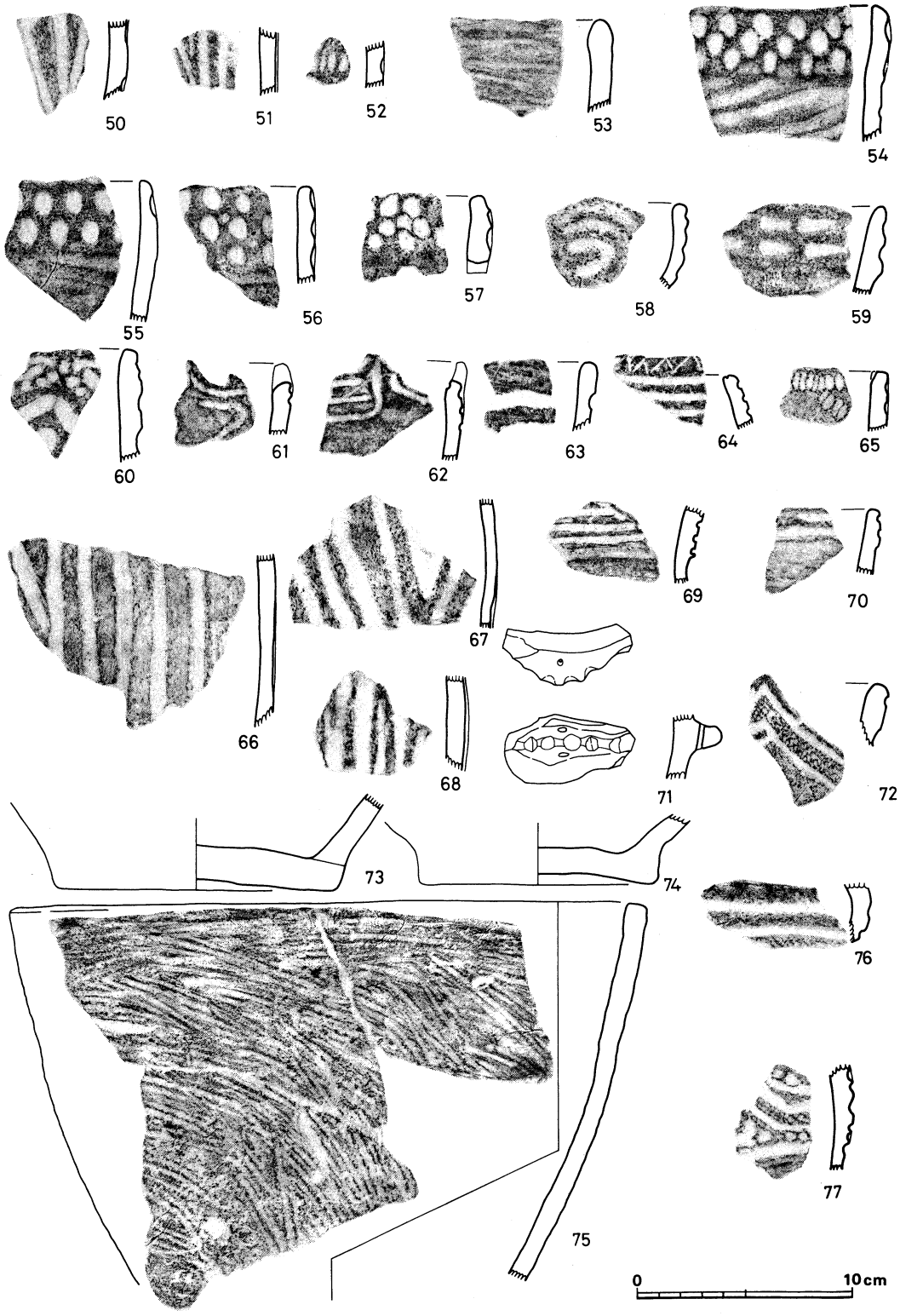
Ⅳ類（59～62，64・69・70）　59は僅かに肥厚する口縁部にヘラもしくは竹管状のもので押し引き文を2段に施す。60は竹管および指頭による凹線を斜位に施し，その区劃内に同様施文具で刺突文と凹点文を配している。61・62は同一個体と考えられ，また64も同様の作風をもっている。61・62はひねり上げたような突起を数か所にもつ波状口縁をなすものと思われ，口縁に沿うように沈線を引いている。また61は裏面にも沈線を施文している。64は3条の沈線文をめぐらし，口唇部に山形の刻み目を入れる。Ⅲ層出土82と同一個体かと思われる。69，70は肥厚させた口縁部に横位もしくは斜位の沈線文をもつもの。69・70以外は滑石粉末を混入する。

Ⅴ類（72）　山形をなす口縁に平行するように沈線を入れ，擬似（？）縄文と無文帯を作っている。石灰分が付着しており調整不詳。口縁部は若干内湾気味である。

Ⅶ類（76）　器表が荒れているが，僅かに磨消縄文が看取される。内面はヘラミガキ。

Ⅺ類（75）　口径約29cmの鉢形粗製土器で，器表内外面に二枚貝腹縁で調整した荒い条痕を残す。

Ⅻ類（71・77）　71は把手部の破片で，粘土を貼付し径3㎜ほどの小孔を穿つ。端部は指で押圧している。滑石粉末を混入している。Ⅳ類に属するものか。77は口縁部に近い破片で，凹線文，刺突文，擬似縄文の組み合わせをもつ。茶褐色を呈する土器で，砂粒を多含しており，脆弱である。器面調整は文様帯下を貝殻で横位に，また内面も貝殻腹縁で調整する。

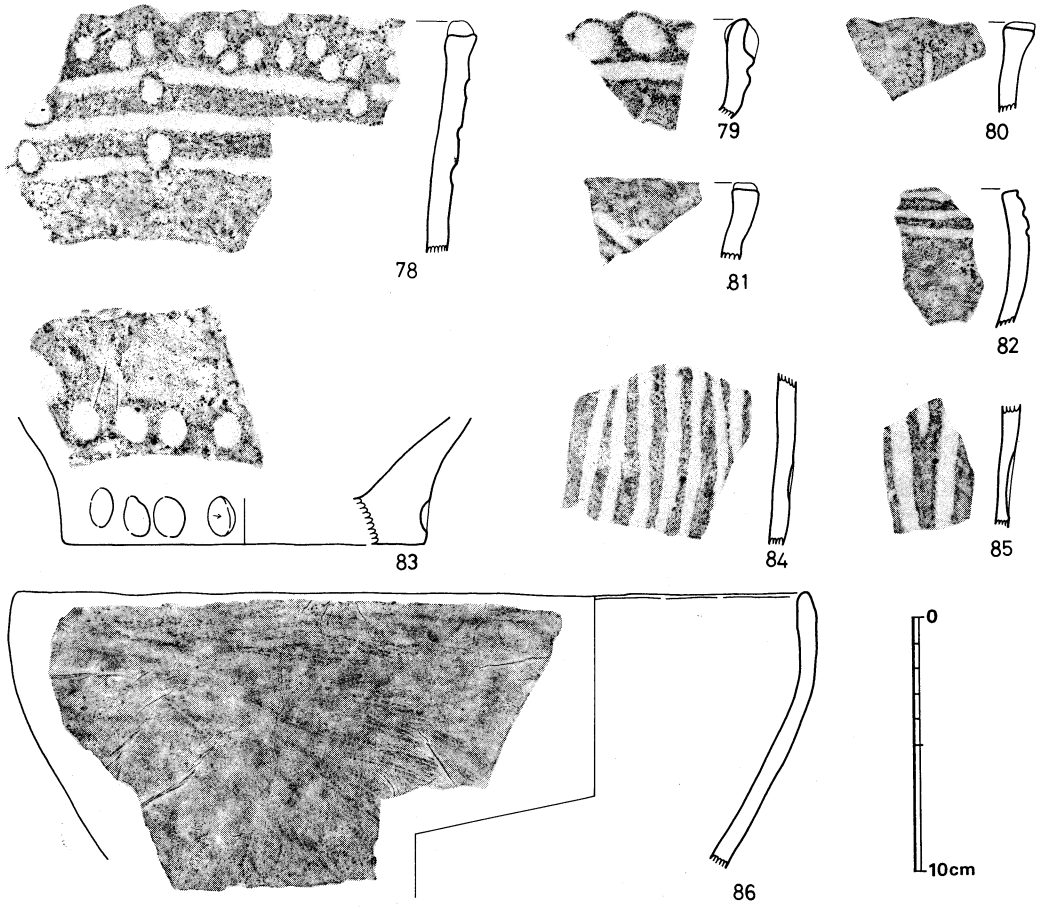


第11図　C区Ⅰ・Ⅱ層出土土器（1／3）

XIV類（73・74）　73は底径12.6cmを測り若干上げ底状をなす。底面には海獣脊椎骨を土器台として作製したと見られ，うすくスタンプが残る。中心径４cmほどは更に凹んでいる。スタンプはナデ消すように調整。内面はササラ状のもので調整し，のちナデにて仕上げる。74は滑石粉末を混入したもので僅かに上げ底となる。底面はナデ，接合部は外面ササラで調整し，のちナデている。内面はササラ調整後，ナデて仕上げる。

●Ｃ区Ⅲ層出土土器（第12図78～86，図版４）

Ⅰ類（78・79・84・85）　78は小波状をなす口縁で，連点文と平行凹線文を組み合わせる。口唇部はユビで押圧。内外面共に貝殻(？)で調整。79は１段の連点文とその下に凹線文を有つ。調整不詳。両者とも滑石粉末を混入する。84・85は断面「U」字形をなす凹線文を縦走させ，85は丁寧にナデて仕上げる。84はヘラ状の施文具かと思われるがこの類に含めた。共に滑石粉末混入。



第12図　Ｃ区Ⅲ層出土土器（１／３）

Ⅲ類（80・81）　両者共相似た形状・施文法・胎土・焼成を示す。口唇部は押圧し小波状をなすようにする。その下位にヘラもしくは竹管による短直線を縦走あるいは斜走させる。内外面共にササラ状工具による調整。施文具によりこの類に含めた。

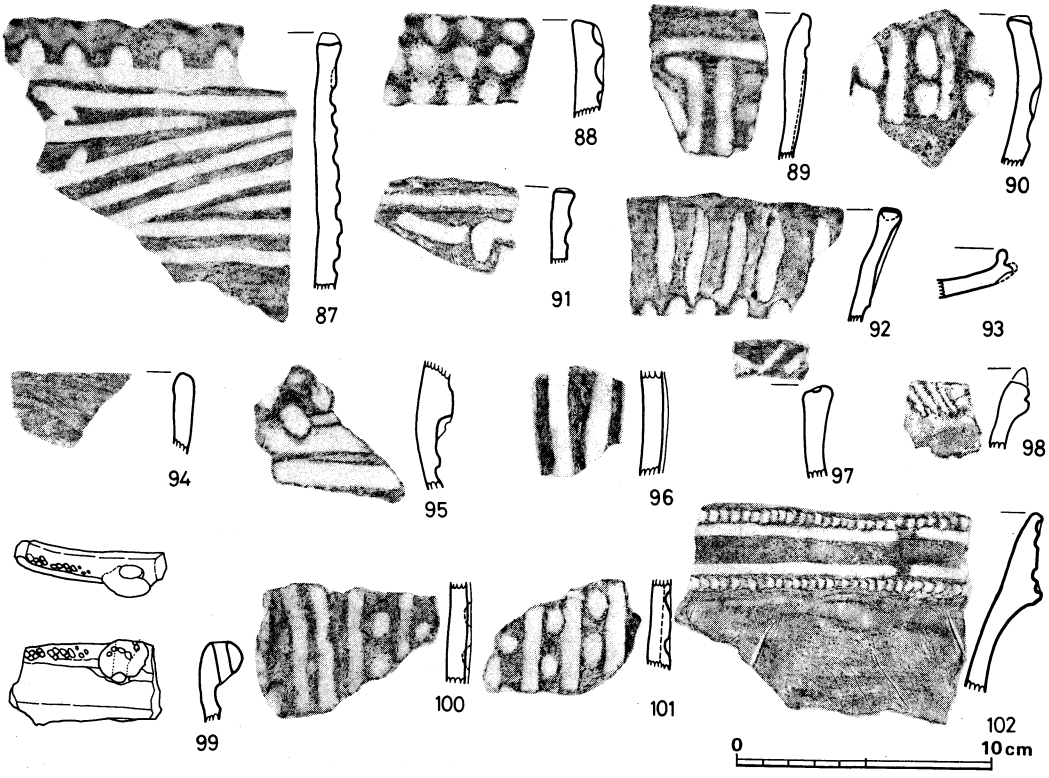
Ⅳ類（82）　内湾する口縁で前出64と同一個体と思われる。外面ササラ，内面貝殻にて調整。

Ⅲ類（86）　口径31cmほどの浅鉢形になるであろう。口唇部は丸くおさめる。器壁は7㎜ほどを測り，ほぼ均一である。外面は貝殻条痕をナデ消し，内面は貝殻条痕である。滑石粉末を含み，焼成は良好である。Ⅲ類前後に伴うと考えられる。

Ⅳ類（83）　底径14cm前後を測り，ユビによる連点文をもつ。内外面共にナデて仕上げる。外面に浅い凹線状のものが看取される。Ⅰ類に伴うものか。

● C区Ⅳ層出土土器（第13図87～102，図版4）

Ⅰ類（87・89・90・95・96・100・101）　87は小波状をなす口縁から胴にかけてのもので，口唇部に押圧文，連点文とそれを切る凹線文，斜走・横走の凹線よりなり，以下はササラ状のもので調整する。凹線文は幅5㎜程の棒状工具で施文し，ナデを施す。内面は貝殻条痕をナデ消している。滑石粉末を僅かに含む。89はつぼまり気味の口縁をなすもので，凹線文，蕨手状文，短直線文をもつ。どのように展開するかは不明である。いずれも指頭によるものである



第13図　C区Ⅳ層出土土器（1／3）

が浅い。90は2段のやや細長い連点文間に短直線を縦に施文する。また口唇部を押圧し小波状に仕上げるようである。下位は無文になるようである。95は2平行凹線文の上位に深い連点文を有つ口縁部片と思われる。内面はササラにて調整。96は幅広の凹線文を縦走させたもので丁寧にナデて仕上げる。内面も同様である。100・101は縦走する凹線文間の無文部に更に凹点文を施文することで文様効果を高めている。凹線は断面「U」字形をなすものの，幅が狭くヘラ状のもので施文したであろうと推される。101の土器は或は横走するものかも知れないことを付け加えておく。いずれも滑石粉末を混入し，焼成良好の土器群である。

II類（88・91）　88は指頭および爪先による連点文を3段に施文し，口唇部は外傾する。91は僅かに波状をなす口縁で，ヘラもしくは竹管による凹線文で文様を構成している。内外面ともササラにより調整している。

III類（92）　外反する口縁部で口唇部は指頭で押圧し小波状をなしている。文様は短直線を縦位に配し，下位は凹点がその間隙に配される。施文具はヘラ状工具である。内外面共にササラ状のもので調整。滑石粉末を含み，焼成は良好である。

IV類（98）　肥厚する口縁部にヘラによる鋭い斜沈線を刻み，刺突文を配している。内外面共にナデ調整で仕上げる。細砂粒を多含している。

IX類（102）　断面三角形をなす口縁部で，上下に竹管による連続爪形文を，その中間に竹管による凹線を配し，始点・終点に同工具で刺突している。内外面共にササラ状工具で調整。

X類（99）　胴部が内湾し，肩部から口縁部にかけて外反するもので，頸部外面はヘラで削り取ってカーブを出している。口縁端部には粘土紐を貼付して把手を作り，擬似縄文を施す。内面は肩部以下はヘラケズリ，上位はナデて仕上げる。

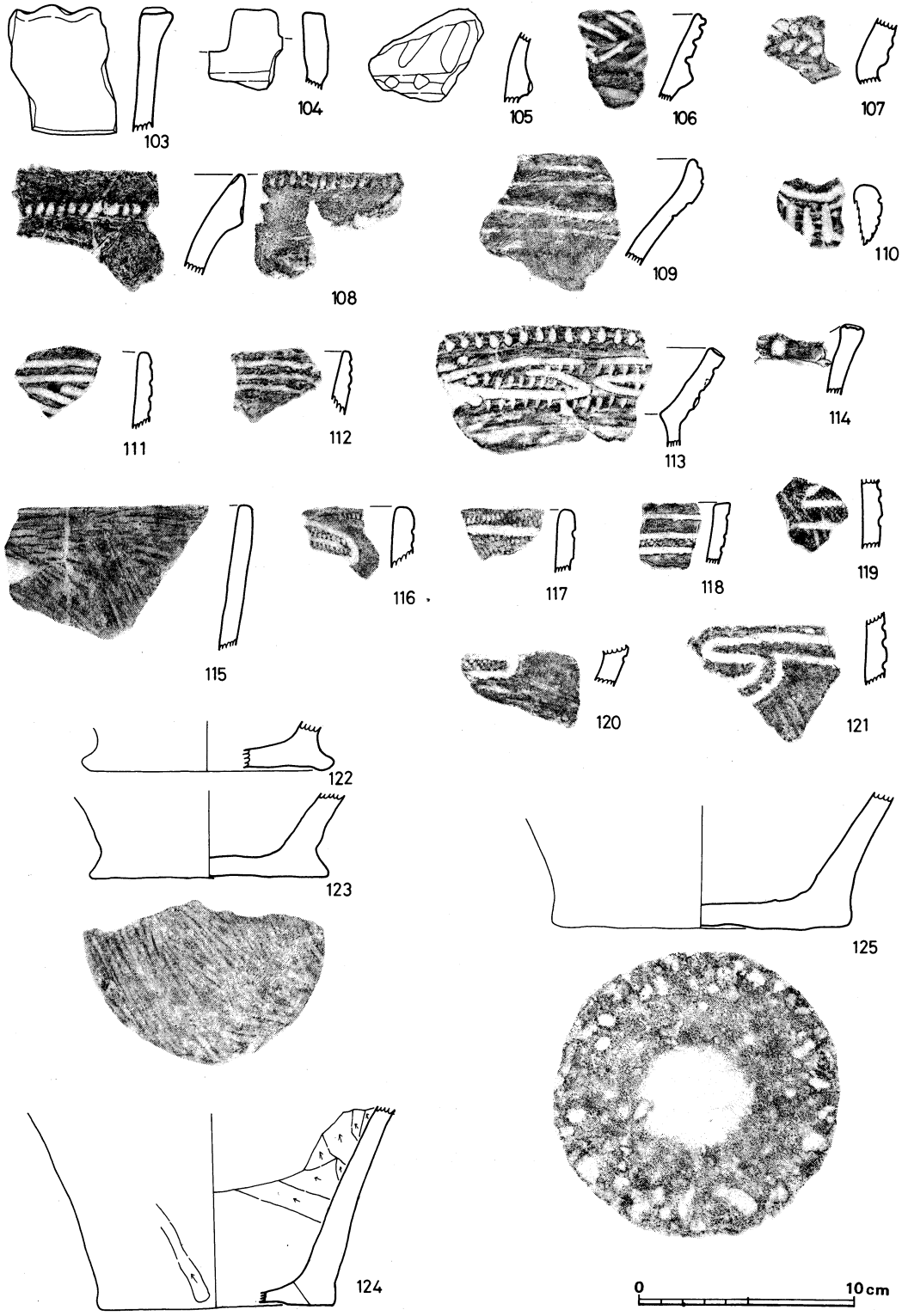
XI類（94）　内外面共に貝殻条痕を残している。細砂粒を多含する。

XII類（93・97）　93は滑石粉末を混入する土器で，丁度須恵器の坏身のような恰好をしている。立ち上がりは6㎜ほどで端部は丸くおさめる。また受け部は現存3㎜位で元来はもう少し延びていたと推される。ミニチュア的要素を持つものか。浅い皿形かもしくは何らかの蓋であろうか。外面ササラ，内面ナデにて仕上げている。97は滑石粉末混入の粗製土器で，口唇部に山形の刻みをヘラにて施文する。64・82の無文化したものと考えられIV類に入るものか。

● D区I層出土土器（第14図～第16図，図版4～5）

III類（105）　隆帯を貼付した外反する口縁部をもつもので，斜位の凹線文と隆帯上の刻みを有している。凹線文はヘラ状のものでかき取るように施文されている。前出の34・35に比較すると退行形態のようである。滑石粉末を混入し，ササラ状の工具で調整している。

IV類（106・107・108・111・112）　106は三角隆帯を貼付して口縁部を作り，稜杉文を深くヘラで施文する。口唇部には1条の沈線をめぐらす。金雲母を含んでいる。107は刺突文で稜杉状にしており，106同様口縁部を肥厚させる。108も同様手法で肥厚させ，口縁下縁に連続刺突文を，また内面にも連続刺突文を施文する。111・112は前記の手法と異なり竹管状のもので平



第14図　D区Ⅰ層出土土器（1／3）

行沈線文,斜位の沈線文を施文する。口縁部の肥厚はない。内外面共にナデにより調整している。

VI類（106～108）　福田KII式の影響を受けたと思われる土器で，116は擬似縄文を施文し，後に沈線で区劃する。縄文帯に赤色顔料を認めることができる。117も擬似縄文施文。118は3本沈線で区劃された2つの文様帯のうち，下段にのみ擬似縄文を施文する。いずれも焼成は良好で，内外面共にナデにて仕上げている。

VII類（119～121，126・127）　119は擬似縄文施文後沈線で区劃し，磨り消しているため，消し残りが認められる。外面ナデ，内面貝殻条痕を残す。120は無文帯はヘラケズリ,内面ヘラによりナデつけられている。121は沈線のみで区劃した縄文帯を持たない土器で126・127も同様である。細砂粒を多含し，焼成は良くない。内面は貝殻条痕を残す。126は復元口径39cmを測る深鉢形土器で，頸部から胴部にかけてやや長くなった器形を示す。口縁部は4か所張り出すと考えられ，その部位に文様の集約部が位置している。文様は口縁部上面を削り出し，そこに棒状工具による刺突文を連続して施文。口唇部には同様工具で押圧文を6か所施文。頸部は斜行沈線文を多用し，張り出し下位に入組渦文を配して集約させる。またその下位に一重の渦文を8か所ほど配すと推される。口縁下には蛇行するような文様が縦位に施文される。この文様は北久根山式や市来式にも取り入れられており，この土器が鐘ケ崎式の中でもやや下降することが知られよう。外面はヘラによる斜位のナデつけ，内面は横位のナデつけで仕上げる。最大径は胴中位にあり，41cmほどである。127は鉢形土器で，かすかに一重の渦文が残る。内外面共にヘラによるナデつけで仕上げる。復元底径8.8cmを測る。

XI類（116・128）　内外面共に二枚貝腹縁によって調整されている。128は唯一全体の知れる土器である。器高28.5cm，口径24.4cm，底形13.2cm，最大径26cmを測る。器壁は1cmとやや厚く底部から僅かに内湾しながら口縁部に到る。器面調整は外面貝殻により，また内面は貝殻ののち条痕をナデ消す。底部は上下面共にナデ調整で仕上げる。

XII類（109・110・113・114）　109は外湾し内傾する口縁部で4条の浅い沈線を施文。黒雲母を含み,内外面共にヘラミガキで仕上げる。109は柏田遺跡1号住居跡出土土器[註11]に類似する。110は口縁把手或は突起部と思われるもので，弧状をなす沈線に，そこから放射状の沈線を引き，間隙に刻みを付けている。内外面共にナデにて調整。113は胴部から内側に稜をつけるように外反するものである。口唇部にはヘラによる連続刻み目文，また口縁部はヘラにより弧状の沈線で区劃し，三角形状の連続刺突文を施文する。また縦に3列円形刺突文も施文する。色調は茶褐色で焼成良好である。114は粗製土器の一種で外面はナデ，内面は貝殻ののちナデて仕上げる。波状をなす口縁頂部に円形刺突文を1個施文する。明橙色を呈し，焼成は良好である。

XIII類（103・104）103は口唇部に押圧文を有する土器で，104は方形の突起をもつ口縁部である。口縁下に浅い沈線を1条めぐらすものと思われる。共に滑石粉末を混入する。

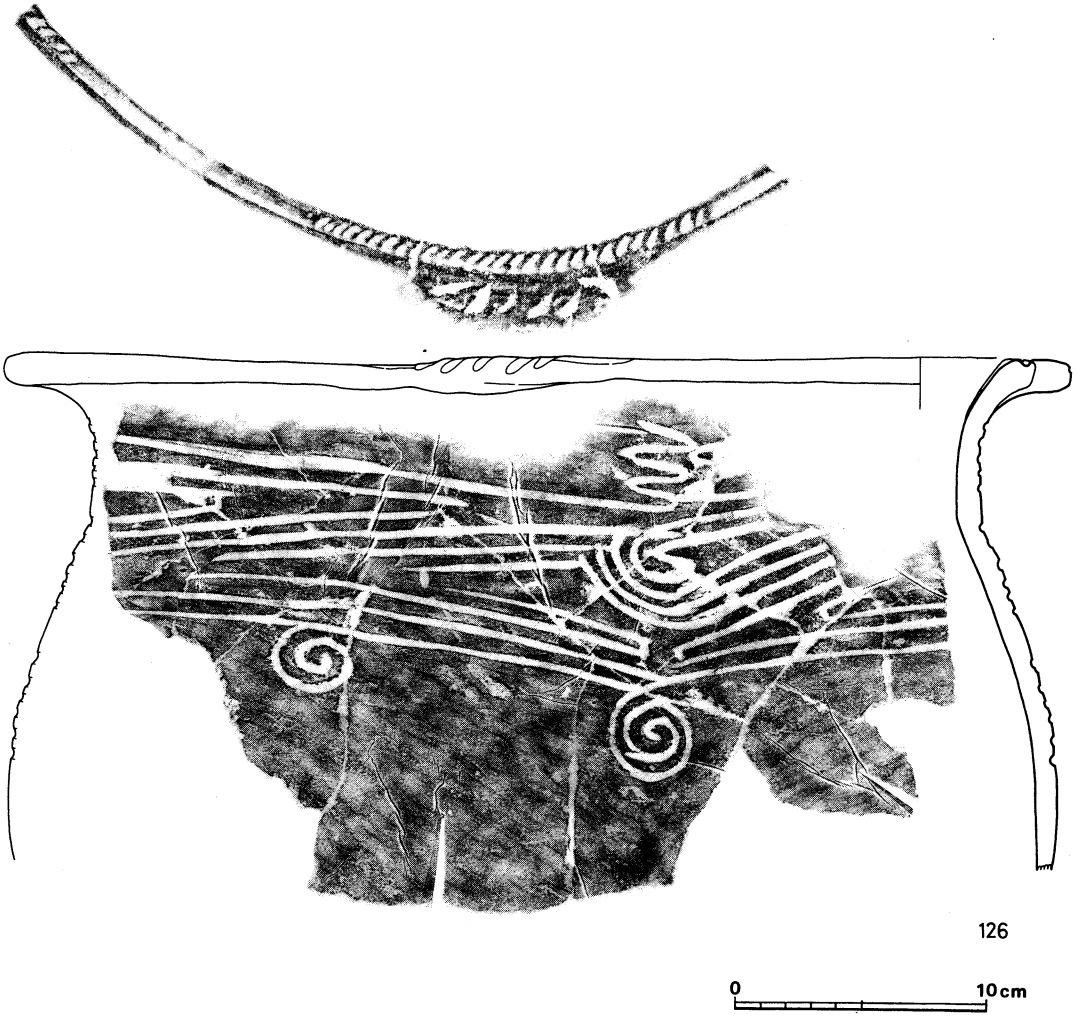
XIV類（122・125）　122は外側にはみ出す底部で，赤褐色を呈し，滑石粉末を混入する。復元底径は12cm内外を測る。125は底径13.6cmを測り，底部に海獣脊椎骨のスタンプを残す。外面は

ササラ状工具により下位は横方向に上位は斜めに調整。また内面はササラ状工具で縦位に調整し，底面はナデる。また接合部は強くナデて仕上げている。

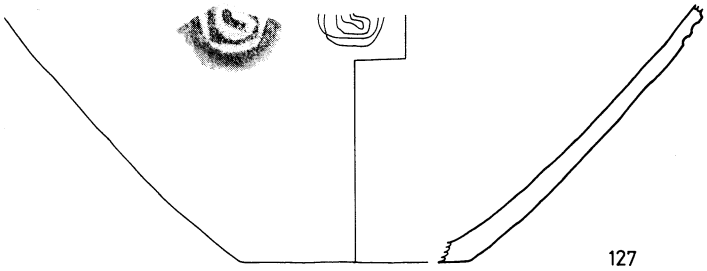
● D区II層出土土器（第14図123・124，第17図～第19図187～192，図版5・6）

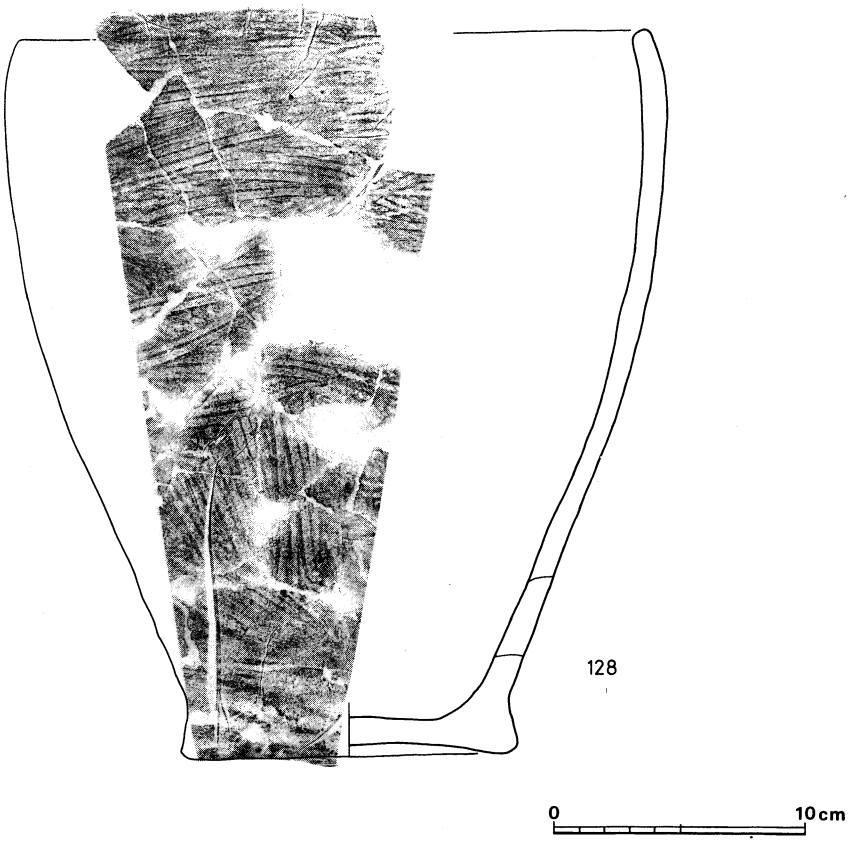
I類（129•130）　129は2段の連点文，口唇押圧文を有し，無文部とは凹線文によって区劃している。ササラによる調整後，指頭により施文する。僅かに小波状をなす。130は平坦口縁で2段に連点文をもつ。連点は指頭によって行い，爪によるたまりはナデにより除去しているようだ。共に滑石粉末を混入している。

II類（131～136，138～142，144・151）　略円形～長円形～長方形の連点文を有つもので指

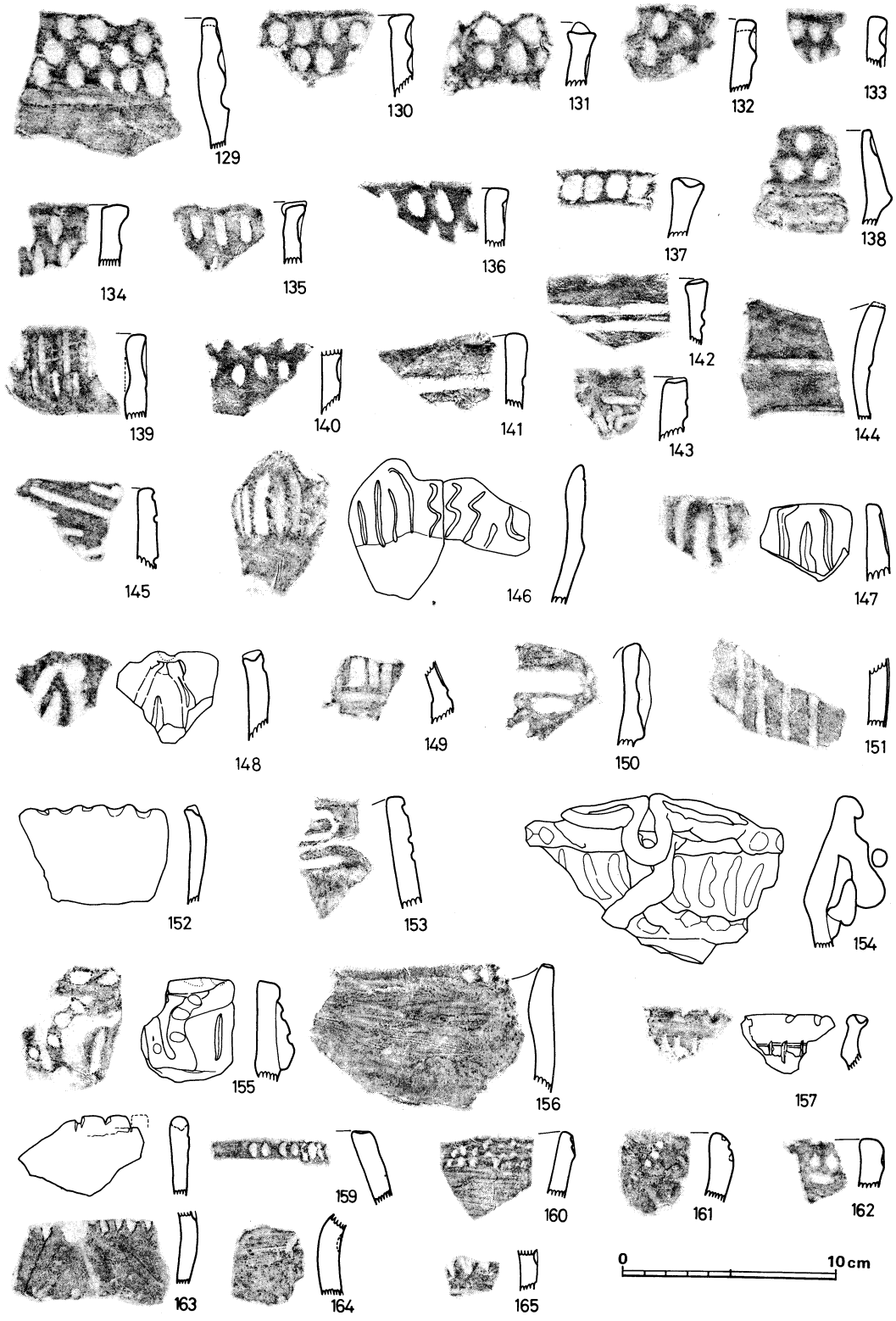


第15図　D区I層出土土器（1／3）





第16図　D区Ⅰ層出土土器（1／3）



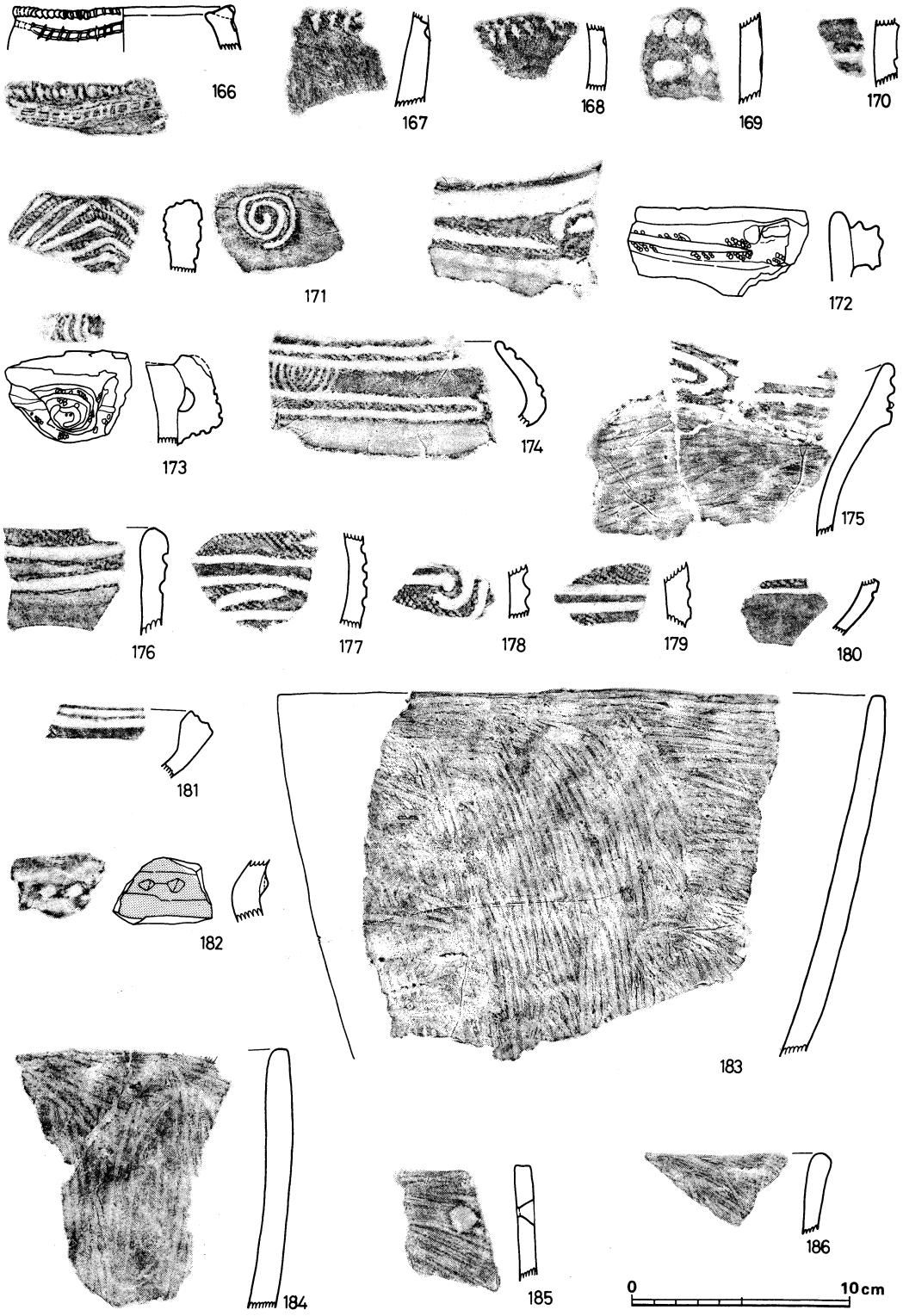
第17図　D区Ⅱ層出土土器（1／3）

頭および爪先，ヘラ状工具を施文具としたもので，131・132・135は口縁部が小波状をなす。他は平担口縁である。138は口縁部を肥厚させており，２段の連点文を有つ。140は連点文のついた胴部片で施文具は指頭および爪先である。141・142・144は１～２条の凹線文をもつものでヘラによって施文している。142は小波状をなすが，他は山形口縁をなす。151は縦走する浅い凹線文を施文したもので，竹管状の工具を使用する。133以外はすべて滑石粉末を混入する。

III類（145～150・153）　ヘラもしくは指頭及び爪先，指頭により施文されたものである。145は平坦口縁で，斜走する凹線を有つもので，施文具の使い方は106に似通っている。146は薄く作られた土器で胎土に金雲母を多含し，焼成も他の土器と比べ異なっている。波状口縁をなし，蛇行するような文様を指頭および爪先で施文する。「S」字状文にも似ている。波頭下に逆S字状文をほぼ縦位に入れ，同様の文様が左右に展開するものと思われる。同様の施文法は器形は若干異なるが147・148にも採用されており，同一施文のモチーフである。148は口唇部に棒状工具による刺突文を有する。148はどのような器形になるか不明である。現状では，２本の平行凹線文上に，縦位の短直線をヘラでかき取るようにして施文している。150は波状口縁と推される。口縁部に粘土を貼付して波状にし，中を指頭により横位にナデで凹線文を施している。このような波頭部が数個付加されるのであろう。内面はヘラケズリしている。153は山形口縁をなすと推されるもので，ヘラにより曲線文，直線文を施文している。145・153以外は滑石粉末を混入する。

IV類（143・154・155・157・166）　143は短沈線及び刺突文を施文したもので，口唇部にも押圧文を有している。内面はヘラケズリしている。154は内湾する胴部に外反する口縁部が付くもので，口縁部と胴部に粘土紐を組み合わせて橋状把手を作出する。この把手を貼付する前に，指頭による弧線文をめぐらし，のち上下に隆帯を貼付し，その上に指頭で刻みを施文する。それから把手を貼付している。155も同様の文様を施文するが，貼付した粘土紐の上及び口唇部に刺突文を施文する点が異なっている。この弧線文は「S」字状文や34・35に見られる文様が変形して出来上ったような感を与える。また隆帯を貼付し，その上に刺突文を施文する手法はVIII類に認められる処からこの類に含めた。157は口唇部に押圧文を有し，口縁部が外反する器形を示している。文様は細い竹管状工具で縦に刻文している。またかすかな条線が横走する。166は壺形を成すかと思われる口縁部である。口唇部は平坦におさめ，端部にヘラによる刻み目をつける。また下位には横走する２沈線間を縦位で区切って文様をつけている。内外面共にナデによって調整。157・166は施文具及びその使い方によってこの類に含めた。

VI類（176・180）　176は幅広の２本沈線に擬似縄文をもつもので，福田KII式の影響を受けて譲成された土器と思われる。直口する口縁で端部は尖り気味におさめている。外面ササラ，内面貝殻により調整。180は植木鉢形をなすと思われる土器で現状２本の沈線と擬似縄文帯を残している。内外面ともにヘラミガキにて仕上げる。



第18図　D区Ⅱ層出土土器（1／3）

Ⅶ類（171～174，177～179）　磨消縄文系のもので，小巻貝とおぼしき施文具による擬似縄文を施文。171はゆるい波状をなすと推される土器で，外面には数条の沈線で区劃し，ヘナタリ属による擬似縄文を施す。また内面には同様施文具で一重の渦文を描く。擬似縄文帯および渦文に赤色顔料を認める。内外面共にヘラミガキされ，胎土は精選され，焼成良好の土器である。172は僅かに内湾する口縁部で，隆帯を貼付し，1条の沈線で上下を分かち擬似縄文を施文している。把手は剝落しており，元来橋状のものが着くものと思われる。また把手上の文様集約部の突起も半分欠損している。器表は内外面共に丁寧なヘラミガキで調整する。173は橋状把手部で，僅かに口縁部を留めている。口縁部は2条のヘラ描き沈線を施文し，口唇部には弧状の連続刺突文を施す。把手部には渦文を描き，擬似縄文を施文。器壁は丁寧にヘラミガキで調整される。172と相似た色調・調整・焼成である。174はキャリパー状をなす口縁部片で浅鉢の器形をなすものであろう。2本1組の沈線を施し，末端部は上下で結合するようになっている。僅かに擬似縄文を認める。沈線によって挾まれた無文部には同心円状の文様を沈線にて描いている。内外面共にヘラミガキにて調整。177～179はヘラによる沈線で縄文帯と無文帯を区劃し，擬似縄文を施文する。178は入組文が認められる。

Ⅷ類（156・158～165，167～170）　156・158・159はヘラによる刺突文を有するもので，156・159は内外面共に貝殻条痕を残し，158は外面ササラ，内面貝殻条痕を残す。160・161は竹管，162は貝殻による刺突文を有する口縁部である。163～165はヘラによる刻み目，167・168は貝殻による連続刺突文，169は貝殻を施文具とした押引き文をそれぞれ施文している。170は2条の沈線を有している。

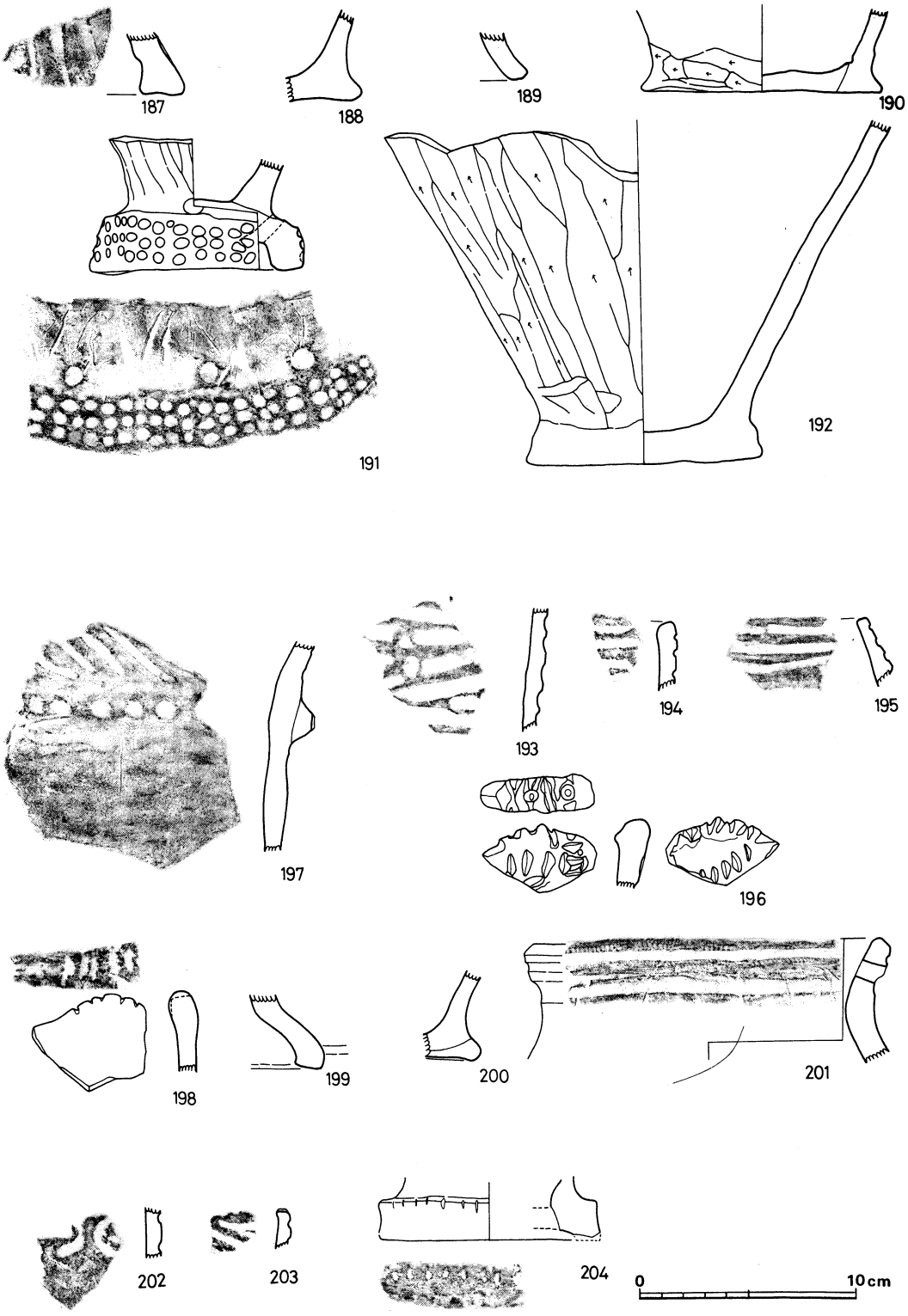
Ⅸ類（175）　口縁に粘土帯を貼付して断面三角形になし，山形口縁をなす深鉢形の土器である。頂部は欠損しているが，2本の平行凹線文と，弧状をなす凹線文が認められる。この2つの凹線文は互いに接することなく終束しているが，前出141に見るような始・終点に施す刺突は認められない。内外面共に貝殻により調整されているが，乾燥途時の調整のため，ミガキのように滑沢をもっている。

Ⅺ類（183～186）　183は復元口径27.6cmを測り，現存高17cmである。1～1.2cmと器壁は厚い。外面は横位・縦斜位，内面は横位に貝殻条痕を残す。口唇部は平坦におさめる。184もほぼ相似た形状を示す。185は補修孔を穿っている。胎土は概して荒く，183は貝殻片も混入する。

Ⅻ類（181・182）　茶褐色を呈する丁寧に研磨された土器で，口唇部に2条の浅い沈線を有する。182は三角隆帯を貼付し，刻み目を入れる頸部片である。外面は赤色顔料を全体に塗布している。隆帯に刻み目を有するところからⅣ類，或はⅧ類の範疇に入るであろうかと思われる。

ⅩⅢ類（152）　小波状をなす口縁部で薄く仕上げている。内外面共にササラによる調整。滑石粉末を混入する。

ⅩⅣ類　（123・124・187～192）　123・124・188・190・192は深鉢形土器底部で径11cm内外のものが殆んどである。123は貝殻条痕文土器の底部，124は外面ササラによるナデつけ，以下はナ



第19図　D区Ⅱ・Ⅲ・Pit出土土器（1／3）

デ，ケズリで仕上げ内面は下半はササラによるナデつけ，上位はヘラケズリを施す。底部は上げ底風に薄く作られている。188は滑石粉末を混入している。190は外面横位のヘラケズリで底部を作出し，上位はササラにて調整。内面はササラにて仕上げる。底面はササラによるナデつけ。192は外面ヘラケズリ，底部はササラ状のもので調整。内面はササラ状のもので横位に削るようにして調整する。189・187・191は脚台部である。187は滑石粉末を混入。縦位のヘラによる浅い凹線文を施文する。190は内外面ともナデにて仕上げる。191は3段に棒状工具による刺突文を配するもので，胴部との接合部位に1cmほどの円孔を6か所ほど穿孔すると推される。胴部外面はヘラによるナデつけ，内面ササラにより調整。脚底面も同手法によっている。Ⅸ類に伴うものか。

● D区Ⅲ層出土土器（第19図193～201，図版6）

Ⅰ類（193）　指頭による凹線文に凹点文を付加する文様をもつ。滑石粉末を混入する。

Ⅲ類（197）　斜位の短凹線文を施し，下位に粘土隆帯を貼付し，指頭押圧している。凹線文はヘラによって施文。外面ヘラケズリ，内面ササラ調整。外面に煤が僅かに付着している。

Ⅳ類（194・195）　194は小波状をなすもので，3条の平行沈線を施文。滑石粉末を混入する。195は肥厚させた口縁部に平行沈線文を3～4条施文。始・終点には押点を付加する。

Ⅷ類（196・198）　196は波状口縁をなす波頭部で口唇部に刻み目を有する。内外面共にササラによる調整。196は外面にヘラによる連続爪形文を施文し，内面も同様に施文している。口唇部はヘラにて刻みを入れ，2か所に竹管で刺突している。内外面共にナデ調整。滑石混入せず。

Ⅻ類（201）　頸部から内湾して立ち上がる口縁を有するもので，口縁部に浅い凹線文をめぐらして文様帯を作り，ヘナタリ属による擬似縄文を施文。補修孔を1孔穿っている。茶色を呈し，胎土・焼成共に良好である。内外面共にナデて仕上げている。復元口径16.7cm。

ⅩⅣ類（199・200）　199は脚台部で滑石粉末を混入している。外面ササラ，内面ナデて仕上げる。前出187に似る。200は外側に張り出す底部で，胴部ササラ，底部ナデ，内面ナデて仕上げる。滑石粉末を混入している。

● D区 Pit 出土土器（第19図202～204，図版6）

Ⅲ類（202）　ヘラによる弧線文と直線文を施文する。滑石粉末を混入する。内外面ササラ。

Ⅳ類（203）　竹管状工具による短直線文と口唇部押圧文を施文。滑石粉末を混入する。

Ⅻ類（204）　外側に張り出す底部で若干上げ底になる。稜線上に刻み目を施す。滑石粉末を混入する。調整不詳。Ⅲ類もしくはⅣ類の底部か。

● E区Ⅲ層出土土器（第20図，図版6）

Ⅰ類（205・206）　口唇部の押圧文，2段の連点文，横走する凹線文をもち，滑石粉末混入。

Ⅱ類（207・208）　207はヘラケズリにて口縁部を作出し，指頭および爪先による連点文を2段に施す。口縁は小波状をなす。208は3段の連点文を有し，最上位のものは口唇部にかかる。指頭および爪先による施文。両者共に滑石粉末混入。

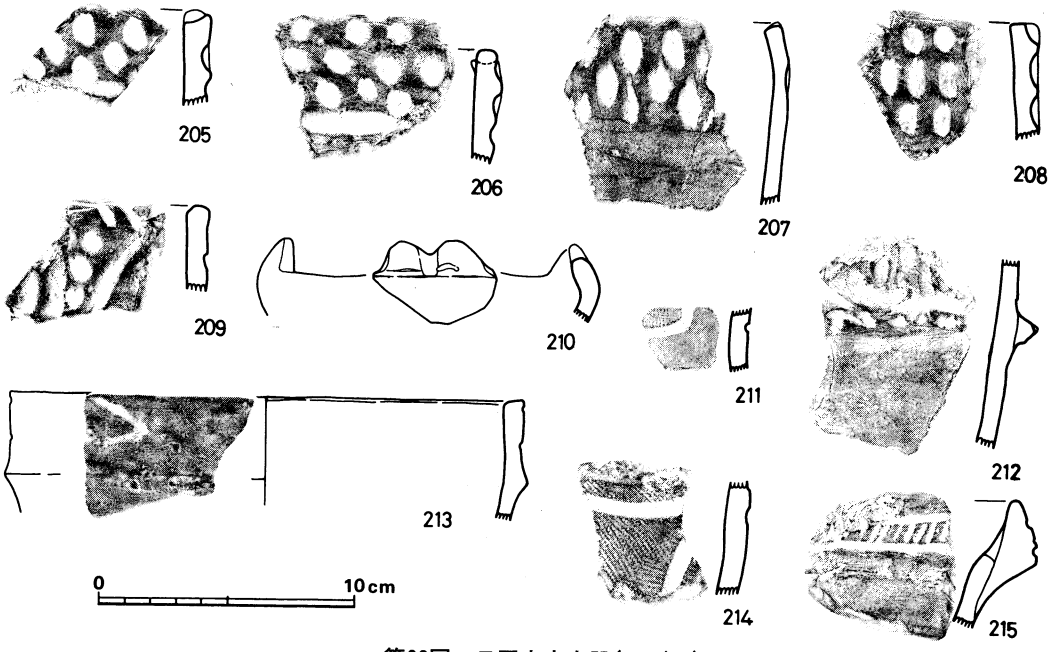
Ⅲ類（209・212・213）　209は指頭および爪先による短弧線を施し，間隙に浅い凹点文を3段に施文する。口唇部はヘラ状のもので押圧している。212はヘラによる短直線をもち，下位に隆帯を貼付し，刻みを施す。内外面共にササラにて調整。213は復元口径20cmほどの鉢形になる器形で，ヘラケズリによって口縁部文様帯を作出。ヘラによる浅い稜杉文を施文する。内面貝殻条痕をナデ消している。いずれも赤褐色を呈し，滑石粉末を混入する。

Ⅴ類（214）　地文に撚りの細い斜縄文を施文し，指による凹線で区劃して磨消縄文帯を作るものである。縄文帯は幅広く取られている。或は小池原式の影響を受けたものか。

Ⅸ類（215）　三角形口縁をなし，上下2本の沈線間にヘラによる刺突文を施文している。茶褐色を呈し，焼成は良好である。

XⅢ類（210）　粘土を貼付して作った小突起部を2個有するもので，粘土の接合部が明瞭である。復元口径11cmほどになる。外面はササラにて調整，内面は貝殻条痕を残している。滑石粉末を混入する。

註4　田中良之　「中期・阿高式系土器の研究」　『古文化談叢』　第6集　1979
5　森醇一朗　「坂下遺跡の研究」　『佐賀県立博物館調査報告書』　第2集　1975
6　西田道世　『阿高貝塚』　城南町教育委員会　1978
7　正林護，安楽勉　「白浜貝塚」　『福江市文化財調査報告書』　第2集　1980
8　安楽勉氏のご教示による
9　河口貞徳　「南九州後期の縄文式土器」　『鹿児島県文化財調査報告書』　第2集　1980
〃　「草野貝塚発掘報告」　『鹿児島県考古学会紀要』　第1号　1952
10　小池史哲外　「春日市・柏田遺跡の調査」　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』　第4集　1977
11　註10に同じ



第20図　E区出土土器（1／3）